

〈書評〉

Peter Lambert and Andrew Nickson (eds.),
The Paraguay Reader: History, Culture, Politics (Durham: Duke University Press,
2013)

武 田 和 久

はじめに

本書は米国デューク大学出版の選集 (Reader) シリーズの1冊である。このシリーズは、ある特定国に関連する重要な先行研究の抜粋紹介である。他のラテンアメリカ諸国に関する選集も既に幾つか出版されている。

本書は英国バース大学のピーター・ランバート (Peter Lambert) とパーミンガム大学のアンドリュー・ニクソン (Andrew Nickson) の共編著である。本書の編集には多くの研究者が協力したと謝辞にあるが、とりわけ後述する三国同盟戦争の世界的権威トーマス・ウィッガム (Thomas Whigham) の貢献が大きい。

編者の一人ニクソンは『パラグアイ歴史事典』(*Historical Dictionary of Paraguay*) をかつて著した (Nickson 1993)。同書はパラグアイ史にまつわる地名、人名、事件、事柄を解説し、同国の全体像を歴史的な観点から理解できる良書であった。本書はこの事典に次ぐパラグアイ研究のための最新の入門書である¹⁾。

本書の導入部には、パラグアイは、永きにわたり、歴史家、ジャーナリスト、旅行作家から無視されてきたとある。南米大陸のほぼ中央に位置するパラグアイは陸の孤島であり、周囲からのアクセスが難しい。同国が生んだ世界的な作家アウグスト・ロア・バストス (Augusto Roa Bastos) は、内陸国パラグアイを「陸に囲まれた島」と呼んだ。また外部からの訪問者も少ないことから、パラグアイは、19世紀には、「ラテンアメリカのチベット」、「アメリカの中の中国」とも呼ばれ、その遠隔性と神秘性が強調された。

パラグアイという国は、現代においても、謎に満ちたイメージを一般に持たれているのではないか。ラテンアメリカの専門家の中にも、パラグアイについてほとんど知らない人もいるのではないか。また研究者でなくとも、アルゼンチンやウルグアイなど隣国の人々の中にも、パラグアイを知らない人は少なからずいる。

本書は、人々の関心を刺激するような、近年のパラグアイの注目すべき動向を説明している。首都アスンシオンに急激な人口増加ならびに都市化の波が押し寄せていること、主要輸出産品として、電気、大豆、牛肉の生産が著しいこと、2010年には14%の経済成長率を達成したこと、国土の北東部に相当量のチタン²⁾の埋蔵が確認されたことなど、パラグアイを取り巻く近年の状況には目を見張るものがある。今や、パラグアイを陸の孤島とする見方は修正すべき時期が来たのだろう。

本稿では、パラグアイという国のよりよい理解、同国を研究するうえで欠かせない諸文献をまとめた本書の構成を紹介し、本書を通じて得られるパラグアイに関する新たな知見を紹介する。また、本書で紹介された幾つかの文献について、近年の研究動向を踏まえながら紹介者の考えを述べる。さらに、パラグアイ研究の今後の発展のために本書が提示する二つのキーワード、先住民グアラニとグアラニ語について、若干の考察を試みたい。

I 本書の構成

本書は全7章からなり、各章は時系列をなす。すなわち、第1章は、スペイン人のパラグアイへの入植以前からスペイン統治期にかけての時期を（主に16世紀から18世紀まで）、第2章は、1811年のパラグアイ独立から70年の三国同盟戦争終結までの時期を、第3章は、同戦争の終結から20世紀にかけての国家再建の時期を、第4章は、チャコ地方の領有をめぐるボリビアとの間で起きたチャコ戦争（1932-35）ならびに以後の内戦の時期を、第5章は、軍人アルフレッド・ストロエスネル（Alfredo Stroessner）が長期独裁体制をしいた時期（1954-89）を、第6章は、同体制の崩壊から現代までの時期に焦点をあて、時期ごとの重要文献が抜粋されている。最後の第7章では、時系列というよりも、ナショナル・アイデンティティや文化といったテーマに特化して、パラグアイ研究をリードする新進気鋭の研究者たちの論考が紹介されている。巻末には本書が紹介する文献の出版が挙がっている。編者が導入部でも述べるとおり、一部は本書初公開であり、また中には、今日では知る人も少ない貴重な文献もある。さらに、パラグアイについての理解を深めるための参考文献が巻末で紹介されている。なお、本書に収められた文献の原文の多くはスペイン語だが、これらの英訳には、パラグアイの現地体験を有する人々による入念な校閲がなされたと、編者は導入部で述べている。

数々の重要文献の紹介と並ぶ本書の特徴は、豊富な地図や写真の挿入である。それぞれには簡潔な説明があり、本文のよりよい理解につながる。紹介者も相当のパラグアイ関連の文献を知るが、本書には初めて目にする写真も幾つかあった。

II 注目点

ここで少し、本書の中の写真の幾つかについて、それらが語る歴史的な背景を踏まえて簡単に紹介したい。本書の52-53ページの間には、カラー写真、地図、絵などが挿入されており、この中でも興味深いのが、パラグ

アイ東部地域における20世紀中葉以降の森林の急速な消失を示す地図である。国土のほぼ中央を北から南へと流れるパラグアイ川を境として、東部はパラグアイ・オリエンタル (Paraguay Oriental) と呼ばれる。この地域には、古くから多様な原生林が生い茂っていた。この東部地域にイエズス会宣教師が先住民のキリスト教化のために建設、運営した布教区 (スペイン語でレドゥクシオン *reducción* またはミシオン *misión*) は、ユートピアとして、18世紀ヨーロッパの知識人の関心を集めた。その理由としては、布教区が、人里離れた密林の奥深くに存在し、外部者にとって神秘的に見えたことと無縁ではなかろう。それほどまでに、かつてのパラグアイは木々であふれていた。しかし1960年代以降、東部地域の森林は急速な勢いで農地化されていく。原因は、「ブラジルグアヨ³⁾」と呼ばれるブラジル系移民のパラグアイへの流入である。これにより、東部地域の森林は、わずか数十年間にほとんど消失した。紹介者が数年前にパラグアイを訪れた際、20世紀中葉に同地に移住したある日系人と面識を得たが、この人物の「昔はあんなに山があったのに、今はほとんど見ない」という言葉を思い出す。

ところで、パラグアイ在住のある研究者が、「この国では、現代においても、多くの事柄が軍事と結びつけられる」と語ったことを覚えている。彼のこの一言を示す端的な写真が本書にある。2010年のサッカー、ワールドカップの際、パラグアイのナショナルチームのサポート企業の一つであった携帯電話会社ペルソナル (Personal) は、チーム応援のためにひとつの写真広告を作成した。チームの中心選手サルバドル・カバニャス (Salvador Cabañas) に軍服を着せて中央に配置し、左手の人差し指を斜め上に高く掲げさせ、兵士に突撃を命じる軍事指揮官の役割を演じさせたのである。彼のすぐそばには、勇ましい表情の兵士が配置され、その周りには、数々の大砲やパラグアイの国旗を手に敵軍へと突入する兵士たちが描かれている。

この写真は、その説明文によれば、中央のカバニャスは三国同盟戦争に

においてパラグアイ軍の総指揮官を務めた時の大統領フランシスコ・ソラノ・ロベス (Francisco Solano López) をイメージするという。ソラノ・ロベスさながら、カバニャスによって率いられたナショナルチームが、ワールドカップという戦場で勝利することを祈念した一枚である。

三国同盟戦争は、1864年から70年にかけて、パラグアイと、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ連合軍との間で起きた総力戦であり、大統領ソラノ・ロベスの戦死により終結した。パラグアイの総人口の大半が死亡し、特に男性の死亡が著しかったと言われる⁴⁾。この戦争により、パラグアイは壊滅的な打撃を受け、復興に多くの時間を要した。前述のサッカー、ワールドカップの広告は、悲劇の英雄ソラノ・ロベスとカバニャスを重ね合わせ、戦争さながら、国家総動員的なイメージを見る者に与える。

さらに歴史をさかのほれば、パラグアイは、スペイン統治時代より、軍事社会の様相を帯びていた。同国の著名な歴史学者ラファエル・エラディオ・ベラスケス (Rafael Eladio Velázquez) も論じたように、パラグアイに入植したスペイン人たちは、16世紀から18世紀までの300年を通じて、常に戦争の危険と不安に悩まされていた。入植の拠点アスンシオンは、周囲の好戦的な先住民から絶え間なく襲撃された。小競り合いのたびに、スペイン人たちは、妻子が捕虜とされ、畑や家畜を荒らされた。こうした状況でスペイン人たちには、軍事訓練や砦の建設など、防備体制の強化が求められた⁵⁾ (Velázquez 1977)。つまりアスンシオンのスペイン人たちは、パラグアイを完全には征服できておらず、特にパラグアイ川西側のチャコ地方の先住民との間では、断続的な交戦状態が数百年にわたり継続していたのだ。換言すれば、歴史的に見てパラグアイには軍事がつきまとい、19世紀の三国同盟戦争がこれに拍車をかけ、現代に至っても、軍事をモチーフとした広告がパラグアイ人一般の関心をひきつけるために利用されるのである。

20世紀に撮影された一枚の写真がパラグアイ史の特徴を示す例として、

撮影者不明の一枚の葉書きがある。これは、収穫後の大量のマテの葉を背中に積んで徒歩で運搬する二人の男性を写したものである。背中にぎっしりと積まれたマテの葉を見ると、その重量や運搬距離など、過酷な労働をしのばせる。

マテ茶は、スペイン統治時代より、パラグアイ唯一の特産品として珍重され、ラプラタ地域のみならず、遠くペルーやチリにも輸出された。パラグアイでは、スペイン人入植者たちの見込みが大きく外れ、貴金属が産出されなかった。こうした状況で商品として注目されたのがマテ茶であった。スペイン統治時代のパラグアイではマテが貨幣として流通していた⁶⁾。

マテ茶の栽培は17世紀中葉のイエズス会布教区で可能になったが⁷⁾、それまでは、人里離れたジャングルに自生するマテの木を伐採し、大量の葉を運搬し、茶へと加工するプロセスが一般的だった。写真が示すとおり、マテの採集と運搬は過酷な労働であり、作業の途中で死者が出ることもあった。そして、こうした重労働に従事させられたのが、他でもない先住民である。スペイン人入植者たちは、先住民をジャングルに派遣しては厳しい労働にあたらせた。

先住民のキリスト教化に携わったイエズス会士など宣教師の中には、マテの葉の採集と運搬の想像を絶する過酷さと、先住民強制労働の実態を告発する文書を執筆した者もいた⁸⁾。しかし、貴金属が産出されないパラグアイにおいて、マテ茶は唯一の換金作物であり、パラグアイの外部でも高値で取引される商品だった。このためパラグアイのスペイン人入植者の間では、先住民をマテに関する労働から退ける話は議論されなかった。つまりマテ茶は、先住民の犠牲のもとで作られ続けたパラグアイの特産品なのである。

Ⅲ 批判点

このように本書は、パラグアイ研究関連の基礎的文献を、豊富な地図や

写真を織り交ぜつつ長期的な視点から取り上げているが、紹介者は、本書の収録文献についていささか異議を唱えたい。本書中の文献はパラグアイ研究の古典だが、先住民グアラニに関する文献の選び方には再考を要するだろう。本書には、ブラニスラバ・ススニック (Branislava Susnik) の『先住民の役割』(*El rol de los indígenas en la formación y en la vivencia del Paraguay*) と、エレース・クラストル (Hélène Clastres) の『悪なき大地』⁹⁾ (*The Land-without-Evil*) がある (Susnik 1982-82; Clastres 1995)。二つともグアラニ研究の名著である。しかし前著は、ススニックの講演会の記録であり、出典が全く記されていない。彼女の研究は確かに精緻で、グアラニに限らず、パラグアイの諸先住民集団の文化や慣習の変容と持続が歴史的な観点から明らかにされた¹⁰⁾。しかし彼女の研究は、本書に収録された『先住民の役割』以外に関しても、論拠の基本となる出典をたどると、それは必ずしも明確でない。ススニックの理論は多くの研究者に踏襲ないし応用されてきたが¹¹⁾、まずは彼女が元にした諸文献の内容を再吟味する必要があるだろう。なお、ススニックの研究の出典が時として曖昧なことは、パリ第三大学のギヨーム・カンデーラ (Guillaume Candela) も同意している¹²⁾。

次にクラストルの『悪なき大地』だが、この本により、終末論的な思想を持つとしてグアラニは有名になった。彼らが理想の楽園を求めてパラグアイから東の大西洋岸に向けて集団移動すると著した20世紀初頭のドイツの人類学者クルト・ニムエンダジュ (Curt Nimuendajú) の『世界の創造と破壊の神話』(*Los mitos de creación y de destrucción del mundo como fundamentos de la religión de los apapokuva-guaraní*) により、グアラニの大移動が知られ始めた¹³⁾ (Nimuenlajú 1978)。そして著名な人類学者アルフレッド・メトロウ (Alfred Métraux) は、これを救世主を求めるグアラニのメシア的な運動と捉え (Métraux 1928)、クラストルは、この起源が数百年前のグアラニの慣習にまでさかのぼれるとした。しかし紹介者は、スペイン統治時代に書かれた多くの歴史文書をみてきたが、グアラニ

によるこうした運動の存在を伝える文書は確認できない。確かにスペイン統治時代には、植民地体制に抵抗するために、グアラニの在来の宗教的ないし政治的指導者が、踊り、歌、弁論などを駆使して様々な運動を試みた。しかしこれらは、グアラニの集団規模の大西洋岸への大移動ではない。つまり「悪なき大地」を求める移動は、グアラニの古い慣習ではなく、むしろ、19世紀から20世紀初頭にかけて起きた比較的新しい現象なのだろう。この点で、フランス国立社会科学高等研究院のパブロ・アントゥニャ・バルボーザ (Pablo Antunha Barbosa) も紹介者と同じ考えである (Barbosa 2013)。

さらに、スペイン統治時代のパラグアイで大規模に展開されたイエズス会による先住民の改宗にまつわる文献として、本書では、18世紀後半の同会の会員ホセ・マヌエル・ペラマス (José Manuel Peramás) が著した『プラトンの国家とグアラニ』 (*La República de Platón y los guaraníes*) が取りあげられている (Peramás 1946)¹⁴⁾。同著は、スペイン領全域からのイエズス会士の追放 (1767-68) の時期に書かれ、イエズス会グアラニ布教区の社会構造や日常生活を、プラトンの『国家』に記された内容と対比させている。イエズス会員のこうした著作が後世の研究者に与えた影響は大きく、本書中のロバート・B・カニングガム・グレアム (Robert Bontine Cunninghame Graham) の『消えた理想郷』¹⁵⁾ (*Vanished Arcadia*) や、フィリップ・カラマン (Philip Caraman) の『失われた楽園』 (*The Lost Paradise*) といった書物のタイトルにもみとれる (Cunninghame Graham 1968; Caraman 1975)。こうした著作は、パラグアイにおけるイエズス会の宣教活動をユートピア思想との関連から読み解く試みである。

しかし、パラグアイのイエズス会布教区の政治、経済活動の研究に関して卓越した業績を残したマグナス・モーナー (Magnus Mörner) は、同地でのイエズス会の活動をユートピア思想と切り離して論じる必要性を指摘した (Mörner 1953)。そしてチリの高名な歴史学者マリオ・ゴンゴラ (Mario Góngora) も彼に賛同した (Góngora 1975)。

紹介者も、この二人の歴史学者に同意している。なぜなら、パラグアイで先住民のキリスト教化に携わったイエズス会士が、ユートピア思想的な背景を持つことを示唆する歴史文書は、現在までのところ見つかっていないからだ。むしろ、経済、軍事活動に深く関与したイエズス会士の姿が、相当数の文書から読み取れる。

ユートピア思想は、「世界の終わりが近づいており、その前に一刻も早く一人でも多くの人間をキリスト教徒に改宗させて備えねば」という、終末論的な思想と関連している。これに関して言えば、4度の大西洋航海の過程で終末論的な考えを抱くようになったコロンブス、16世紀前半のメキシコにわたったフランシスコ会士たち、トーマス・モアの『ユートピア』に触発されて施療院を建設し、先住民の集団改宗と保護に携わったミチョアカンの司教バスコ・デ・キログ (Vasco de Quiroga) などは、新世界にユートピアの建設を夢見た人々で見なせる¹⁶⁾。しかし17世紀初頭にパラグアイで布教区の運営を始めたイエズス会士は、ユートピアというよりも、世俗的、現実主義的な側面が強い。実際に前述のペラマスも、布教区をブラトンの『国家』に重ねて書物を著したのは、スペイン領全域からのイエズス会の追放時期であり、時のヨーロッパ主要国で会が強い批判にさらされた時期である。つまりペラマスは、批判を回避するために布教区をユートピアに重ねたのかも知れない。そう考えれば、彼自身も、現実主義的なイエズス会士の一人に他ならない。

いずれにしても、パラグアイのイエズス会士の活動をユートピアと関連づけることは、現存史料の観点から難しいだろう。本書では、ペラマスの著作を取り上げ、イエズス会布教区のユートピア性がまるで存在したかのように読者に提示するよりも、現在の研究動向を的確に紹介することが必要だったと、紹介者は考える。むしろ大事なのは、イエズス会布教区がユートピアと認識されるに至った思想史的な背景の解明だろう¹⁷⁾。

おわりに

以上、本書の構成、注目点、批判点について述べてきたが、「はじめに」で記したとおり、本書がパラグアイ研究史に重要な足跡を築いた最新の出版物である事実には変わりはない。その根拠の一つとして、編者の一人ランバートが自身のエッセイで述べた「グアラニ」の虚構性である。彼は、現在のパラグアイの総人口に占める先住民の割合はわずか2%として、しかもこうした先住民はグアラニではないと明言したのである。つまり現代パラグアイにおいて、遺伝子学的に「グアラニの血」はほぼ絶えたというのがランバートの主張である。そして彼は、グアラニ語研究の世界的権威バルトメウ・メリア (Bartomeu Melià) もこれに同意すると言う。この指摘は非常に重要と紹介者も考えている。

一般にパラグアイ人はスペイン人とグアラニの混血と言われる。しかし紹介者自身も、パラグアイ研究を進めるにつれ、この言説には懐疑的になった。(1) スペイン統治時代末のイエズス会の追放と大多数のグアラニの離散、(2) 19世紀以降のパラグアイの政治指導者が推進したスペイン人と異人種間との混血の奨励、(3) 三国同盟戦争における相当数のグアラニの死亡、(4) 戦後のヨーロッパ、アジア系移民の急激な流入など、諸要因が重なり、生粋のグアラニは大半が消滅したというのが紹介者の考えである。確かに現代パラグアイには、キリスト教と土着の要素があわさった慣習を保持するグアラニの末裔と呼ばれる人々が存在し、彼らもそのように自身を同定している。しかしその多くは、「グアラニ化した人々」とみなすべきだろう。スペイン統治時代のイエズス会の活動を通じて相当数の先住民がキリスト教に改宗し、その大半はグアラニだったと言われる。しかしこれとは別に、相当数の先住民が改宗を拒み、独自の文化、慣習を保持しながら今日まで残ったケースも少なくない。おそらく、キリスト教化したグアラニが前述の諸要因を受けてこうした先住民と接触し、後者が前者の影響を受けて「グアラニ化」したのだろう。

「グアラニはもはや存在しない」という本書の明確な主張は、パラグア

イのナショナル・アイデンティティの根幹に関わる。しかし、適切な学術的調査を経て導き出された結果がそうならば、これを事実として受け入れねばならないだろう。重要なことは、事実に基づいた自己同定の仕方である。

また本稿の「はじめに」では、パラグアイがこれまで研究対象とされにくかった経緯を述べたが、近年では、「グアラニ語」をキーワードとして、同国を注視する研究者が増えつつあるという本書の指摘も、パラグアイ研究の将来的な発展を見据えるうえで重要である。編者ランバートの指摘では、2002年の国勢調査において、パラグアイ人の53%が、スペイン語よりもグアラニ語を話すことに心地よさを感じ、農村部ではこの割合が83%にまで上昇するという。パラグアイにおけるグアラニ語の存在感は大きく、パラグアイ人の間で先住民言語が一般に好まれるという興味深い状況がある。今日、先住民言語と言え、メキシコのナワトル語、ペルーのケチュア語、ボリビアのアイマラ語などが挙げられるが、いずれも、一般のメキシコ人、ペルー人、ボリビア人が使うことはない。これらは先住民たちの言葉とされ、こうした国々ではスペイン語が好んで使われる。しかしパラグアイでは、スペイン語単一話者の割合は非常に少ない。むしろグアラニ語しか話せない人々が農村部に相当の割合で存在する。彼らへの教育の普及や情報の伝達には、グアラニ語で書かれた文書が作成されている。

パラグアイにおけるグアラニ語のこうした位置づけは、今日、研究者の注目を集めている。欧米諸国でもグアラニ語に関する研究が進み¹⁸⁾、日本でも京都大学の塚原信行がグアラニ語と教育の関係の研究に取り組んでいる(塚原2012)。また視点が少し異なるが、パリ第三大学のカプシーン・ボワダン(Capucine Boidin)は、スペイン統治時代に書かれたグアラニ語文書をすべて収集し、スペイン語訳をつけてインターネットに公開するプロジェクトを進めている¹⁹⁾。現代パラグアイで用いられるグアラニ語は、ジョパラ(jopara)と呼ばれるスペイン語との混合言語である²⁰⁾。グ

アラニ語を流暢に操る現代のパラグアイ人でも、「昔のグアラニ語は読めない」と言う人もいる。ボワダンのプロジェクトは、グアラニ語のこうした差異と連続性を解明する大きな一助となるだろう。彼女が管理するホームページにはスペイン語訳が付されることで、古典グアラニ語を解さないパラグアイ人にとっても、自分たちのルーツをたどる有益な道具となるはずである。

本書がパラグアイ研究のさらなる発展に向けて提起しているのが、「グアラニの虚構性」と「グアラニ語」だが、いずれも、パラグアイのナショナル・アイデンティティの根幹に関わる問題である。いうなれば、これら二つのテーマを学術的に丁寧に解明、裏付けることで、パラグアイとは何かという根源的な問いへの答えが導き出されるだろう。本書は、パラグアイ研究を志す人々に対しての最新の入門書であり、既存のパラグアイ研究者に対しては、重要な課題を提示する問題提起の書物でもある。

註

- 1) 学術的観点からパラグアイの諸相を紹介した邦語文献については(田島・武田2011)を参照いただきたい。
- 2) 腐食しにくい金属として、主に航空機の部品として使われる。
- 3) スペイン語では *brasilguayo* と綴るが、むしろ現在、一般に知られるのは、ポルトガル語の複数系 *brasiguaio*s である。
- 4) 三国同盟戦争に関する研究は数多いが、本稿ではウィッガムの研究をあげておきたい (Whigham 2002)。
- 5) アスンシオン近郊に存在した砦を描いた図が、スペイン、セビリヤのインディアス文書館 (Archivo General de Indias) の史料群 Buenos Aires15 ならびに298に収められている。
- 6) スペイン領アメリカにおけるマテの流通を扱う研究としては (Garavaglia 1983) が秀逸。
- 7) マテ茶の栽培をはじめ、イエズス会布教区の経済システムの全容については (Carbonell de Masy 1992) が詳しい。
- 8) こうした文書はポルトガルの歴史家ジャウマ・コルテザウン (Jaime Cortesão) の編集により、アンジェリス・コレクション文書 (Manuscritos

- da Coleção de Angelis) として、現在まで7巻がブラジル、リオデジャネイロの国立図書館から刊行されている。
- 9) 原著は1975年にフランス語で出版。本稿では1995年出版の英語訳を参照した。
 - 10) ススニックが公にした研究成果の一覧が (Chase-Sardi 1996) に収録されている。
 - 11) 例えば (Roulet 1993; Soares 1997)。
 - 12) カンデーラとの議論。フランス、マルセイユ、2013年6月。
 - 13) 初版は1914年にドイツ語で出版。1944年ならびに1978年にスペイン語訳が出版。本稿では1978年版を参照した。
 - 14) この本は1793年にイタリアで出版された *De vita et moribus, tredecim virorum* 中の第一部に相当。本稿では1946年出版のスペイン語訳を参照した。
 - 15) 初版は1901年。本稿では1968年版を参照した。
 - 16) コロンブスの終末論的な思想は、彼が第三次航海を終えた1500年以降から顕著になったとされる。この頃から彼は『予言の書』 (*Libro de las profecías*) の執筆に取り掛かった (Colón 1992)。16世紀前半メキシコにおけるフランシスコ会の活動については (Phelan 1970)、バスコ・デ・キロガについては (Warren 1963) を参照。邦語文献としては (増田1971; ピコン=サラス 1991) が参考になる。
 - 17) この意味で、『パラグアイの発明』 (*L'invenzione del Paraguay*) を著した (Imbruglia 1987) は注目に値する。
 - 18) 例えばドイツ、マインツ大学の次のホームページはこの成果である。
<http://www.staff.uni-mainz.de/lustig/hisp/guarani.html> (2014年3月12日アクセス)
 - 19) http://josephine.inalco.perso.sfr.fr/recherche_lexicale.php (2014年3月12日アクセス)
 - 20) ジョパラに関しては (田島1996) が参考になる。

参考文献

- 田島久歳1996.「グアラニー語・スペイン語バイリンガル社会の形成—パラグアイのグアラニー・ジョパラ語形成におけるスペイン語の影響—」(『ラテンアメリカ・カリブ研究』第3号) 7-16ページ。
- 田島久歳・武田和久編2011.『パラグアイを知るための50章』明石書店。
- 塚原信行2012.「パラグアイー言語政策の移植は可能か—」(砂野幸稔編『多言語主義再考—多言語状況の比較研究—』三元社)、142-166ページ。

増田義郎1971.『新世界のユートピア』研究社出版。

ピコン＝サラス、マリアーノ1991.『ラテンアメリカ文化史—二つの世界の融合—』グスタボ・アンドラーデ・村江四郎訳、サイマル出版会。

Barbosa, Pablo Antunha. 2013. “La «Terre sans Mal»: la trajectoire historique d'un mythe guarani et d'un mythe anthropologique,” *Nuevo Mundo Mundos Nuevos* (<http://nuevomundo.revues.org/65288>).

Caraman, Philip. 1975. *The Lost Paradise: An Account of the Jesuits in Paraguay, 1607–1768*. London: Sidgwick and Jackson.

Carbonell de Masy, Rafael. 1992. *Estrategias de desarrollo rural en los pueblos guaraníes: 1609–1767*. Barcelona: Antoni Bosch.

Clastres, Hélène. 1995. *The Land-without-Evil: Tupí-Guaraní Prophetism*. Urbana: University of Illinois Press.

Colón, Cristóbal. 1992. *Libro de las profecías*. Madrid: AEUS.

Cunninghame Graham, Robert Bontine. 1968. *A Vanished Arcadia: Being Some Account of the Jesuits in Paraguay, 1607–1767*. New York: Haskell House.

Garavaglia, Juan Carlos. 1983. *Mercado interno y economía colonial*. México: Grijalbo.

Góngora, Mario. 1975. *Studies in the Colonial History of Spanish America*. Cambridge: Cambridge University Press.

Imbruglia, Girolamo. 1987. *L'invenzione del Paraguay: studio sull'idea di comunità tra seicento e settecento*. Napoli: Bibliopolis.

Métraux, Alfred. 1928. *La civilisation matérielle des tribus tupi-guarani*. Paris: Paul Geuthner.

Mörner, Magnus. 1953 *The Political and Economic Activities of the Jesuits in the La Plata Region: The Hapsburg Era*. Stockholm: LIIAS.

Nickson, Andrew. 1993. *Historical Dictionary of Paraguay*. Metuchen: Scarecrow Press.

Nimuendajú, Curt. 1978. *Los mitos de creación y de destrucción del mundo como fundamentos de la religión de los apapokuva-guaraní*. Lima: CAAAP.

Peramás, José Manuel. 1946. *La república de Platon y los guaraníes*. Buenos Aires: Emecé.

Phelan, John Leddy. 1970. *The Millenial Kingdom of the Franciscans in the New World*. 2 ed. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

Roulet, Florencia. 1993. *La resistencia de los guaraní del Paraguay a la conquista española(1537–1556)*. Posadas: EU.

- Soares, André Luís R. 1997. *Guarani : organização social e arqueologia*. Porto Alegre : EDIPUCRS.
- Susnik, Branislava. 1982-83. *El rol de los indígenas en la formación y en la vida del Paraguay*. Vols. 1-2. Asunción : IPEN.
- Velázquez Rafael Eladio. 1977. "Organización militar de la gobernación y capitania general del Paraguay," *Estudios paraguayos* 5 (1), pp. 25-68.
- Warren, Fintan B. 1963. *Vasco de Quiroga and His Pueblo-Hospitals of Santa Fe*. Washington, DC : AAFH.
- Whigham, Thomas. 2002. *The Paraguayan War*. Vols. 1-2. Lincoln : University of Nebraska Press.